

生徒を動かし続ける日本史の授業

ー日本史における言語活動が生徒の歴史学習に対する先入観を変えていくー

千葉県立〇〇高等学校 〇〇〇〇(日本史)

1 はじめに

新学習指導要領日本史Bの目標は、「我が国の歴史の展開を諸資料に基づき地理的条件や世界の歴史と関連づけて総合的に考察させ、我が国の伝統と文化の特色についての認識を深めさせることによって、歴史的思考力を培い、国際社会に主体的に生きる日本国民としての自覚と資質を養う」ことであり、そのために各時代の特色及び変遷を総合的に考察することを一層重視している。またそのことについて学習指導要領解説では、日本史Bの学習において大切なことは「決して個別・詳細な知識を数多く記憶することではなく、生徒自身が考察して大きな視点でとらえ、納得と理解を踏まえた自分自身の言葉で明確に表現できることである」と説明している。しかし後述のとおり「日本史＝暗記科目」と考えている生徒が非常に多い、この現状(生徒の先入観)を打破することが日本史授業にも期待されていることであり、本研究でも重視していきたい。

2 主題設定の理由 ～生徒の実態把握を含めて～

年度当初の生徒(まだ高校で日本史を学んだことがない生徒)の意識調査で、日本史が好きな生徒の割合が約59.8%である反面、得意という生徒は約29.6%しかいないことが伺えた。「苦手の理由」として大きなウエートを占めているものは「暗記が苦手」「意味が分からず暗記してても面白くない」「一生懸命覚えても全然点数がとれない」という「暗記」に関わることであった。そのことは別の設問において「日本史＝暗記科目」と思っている生徒が約70.6%を占めることにもあらわれている。これまでの歴史に関する意識(先入観)が伺える結果である。暗記だけの勉強では、自分の言葉で論述出来なくなったり、知識の定着に結びつかなくなる可能性が大きいと思われる。また学習指導要領解説にも「決して個別・詳細な知識を数多く記憶することではなく・・・」とあることから、「日本史＝暗記物」と考えている生徒の割合が7割を超えていることは問題であり、暗記中心の勉強をやっている生徒が多い現状では「日本史が嫌い」「日本史が苦手」な生徒の割合は減りにくいと思われる。このことは日本史授業を構成していく上でとても重大な意味を持つと思われる。

「覚えること」を否定するつもりはない。勉強のし始めから「意味も分からず単語・文章を丸暗記する」ということを問題視しているのである。「ストーリーを解釈していたら自然に覚えた」「ストーリーを把握した上で単語等を暗記してみたら楽しく簡単に頭に入った(ものには順序がある)」という生徒の認識があり、このような形態の授業をめざしていきたい。「日本史ってこんなに楽しかったんだ」という意識を生徒に持たせることが、メモの取り方・考えること・ストーリー化して解釈する能力・テストの点数・家庭学習の習慣・生涯学習など、あらゆる面での成長に関わってくる重要なポイントである。日本史は興味を持ちさえすれば一生つきあえるものであり、その生涯学習の動機付けという観点からも、高校時代に日本史に対する意識改善を行うことはとても重要である。

また、学習の苦手な生徒の多い学校で約15年間授業をしていたこともこうした問題を考えるきっかけである。現勤務校では「生徒を動かし続ける」ことをやらなくても、授業中生徒が騒ぐこともなく、必要があれば自ら勉強を始める。が、以前の勤務校ではそれでは、授業内容云々以

前の問題が生じてきた。そこで生徒に「何か面白そう」「へ～そうだったんだ」「暗記しなくてもいいんだ」と思わせられないだろうかと考えたことがスタートである。色々と考えてみたが、現物(石器など)を利用するとしても毎時間用意しきれない。その過程で「1年間通してできる工夫はないものだろうか?」と考えるようになった。

3 研究の仮説

学習の苦手な生徒の多い学校で「生徒を動かし続ける日本史の授業」を実施した場合、進学校での場合と異なる場面も当然のことながら多々出てくる。例えば、メモを取らせると明らかに平仮名が多くなったり、書く時間が何倍もかかったり、また授業に参加する意志が全くない生徒の指導に時間がかかったり……。しかし「生徒を動かし続ける日本史の授業」において一番重要なことは、生徒自らがメモする・考える・発表する等の行動を「授業中常に実行し続ける」ことにある。従って「生徒を動かし続ける日本史の授業」は全ての高等学校で求められているものである。これは新学習指導要領における「言語活動の充実」に直結する。

「生徒を動かし続ける日本史の授業」を展開し続けることができれば、まとめていく力・表現力などが身に付き、さらには日本史がストーリーとなって生徒の記憶に自然に残るようになり、日本史に対する生徒の意識改善につながるであろう。

4 具体的な取組の概要

(1) 生徒に授業中常にメモを取り続けさせる工夫 … 5参照

生徒が教師の解説を聞き、それを頭の中で自分の言葉に直す、その後プリント(またはノート)にまとめていく。

(2) 生徒に自ら考える癖をつけさせる工夫 … 6参照

生徒が自ら考える時間、それを生徒同士で検討する時間、さらにそれらを文章化する時間を、たとえ短時間でも設ける。

5 生徒に授業中常にメモを取り続けさせる工夫

(1) メモをとる目的

メモの取り方の本質を考える大前提となる「なぜメモを取る必要があるのか?」ということについては、改めて考えられる事はあまりない。しかし目的を持って行うのとそうでないのでは効果が全く異なる大切な事である。次のア～ウの目的は一見当然のように思われるが、生徒に聞いてみると「先生がとれっというから」「ノート点を上げるため」「みんなが取っているから」「今までの習慣でなんとなく」などと漠然とメモをとる場合が結構見受けられるのが現実である。だからこそ自分の表現で、後で見てわかるようにメモをすることの重要性を、事ある毎に何度も指導していくことが、当たり前だからこそ、大切となる。

ア 人間は忘れるから

イ メモを取ることで、聞いた解説を頭の中でまとめ、自然に知識として定着していくから

このことは板書の字を無意識に写しているだけでは達成できない。解説をリアルタイムで聞いて「自分の表現でメモする」という作業がとても重要となってくるのである。

ウ 授業に集中でき、歴史的思考力を鍛えられるから

メモをとることは、授業に集中する方法でもある。

(2) メモの取り方

ア プリントに印刷されている文章

授業用プリントは、基本的には板書形式の板書にあたる部分を多少詳しくしたモノを印刷している。しかしプリントの文章はどうしてもかしくまった表現になることが多い。そのため解説の際には、かみ砕いた表現で何種類か説明することを心掛け、それを該当箇所(かしくまった表現の文章のすぐ下の余白など)に自分の言葉で確実に記入させていく。これにより「後で見えてわかるプリント」となっていくのである。

(ア) 磐井の反乱	プリント記載：	5世紀頃から大和政権は次第に地方の支配を強めていった。
	生徒の記入例：	地方のことに口出しするようになった。
		地方に対しあれこれ言い始めた。
(イ) 寄進地系 荘園の成立	プリント記載：	地方の乱れにより自衛が必要となってきた。
	生徒の記入例：	政府が守ってくれないので自分で守ることが必要となった。
		藤原氏がなにもしてくれないので自分のことは自分でやる。

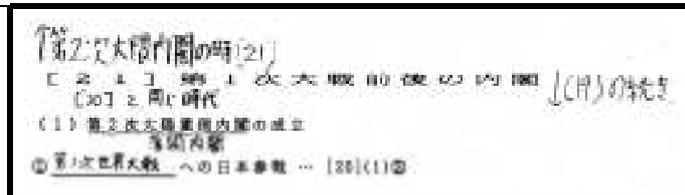
<図1：プリントの記載と生徒の記入例>

イ プリントの項目どうしのつながり

プリントの構成上(解説の都合上)、どうしても年代順に内容がまとめられるわけではない。そのためどの項目からどの項目に繋がっているか、またどの項目とどの項目が同時代のことなのかを確実にメモさせることにより、歴史的なつながりを把握させる。ストーリー性重視の授業においてはとても重要なことである。

<例> [19]第1次護憲運動と大正政変 … (1)第2次西園寺内閣～(3)第1次山本内閣
[20]第1次世界大戦勃発と二十一カ条の要求
[21]第1次大戦前後の内閣 … (1)第2次大隈内閣～(5)加藤内閣

このような構成のプリントの場合、[19](3)の終わりに「[21]に話がつながるよ」ということを、さらに[21]の最初に「[19]から繋がってるよ」ということを確実にメモさせる。さらに[20]と[21]が同時代の内容であることも明記させる。



<図2：授業構成と生徒のメモの記載例>

(3) メモを取りやすくする解説の工夫

次に挙げることは日本史の授業担当者であれば誰もが解説の際に心がけていることだと思う。しかしこの解説の工夫は「生徒にいかにもメモさせるか」という視点に立つて行うことが重要なことであると私は考えている。

但し、変な先入観を生徒に持たせないためにも、発問・発表・解説等の際に普段から何度も「歴史の見方には多面的要素がある」ということを説明し、生徒に定着させておくこと(例：「6(3)ア」)が、以下のような解説をする際は不可欠である。

ア 大きな流れを確認しながら解説をしていく

細かい内容を解説する時は往々にして大きな歴史の流れを見失いがちである。そのため、各項目に入る前に導入として解説することを初めとして、各項目のポイント毎に繰り返し大きな流れを確認しながら授業を進めていくことが必要である。例えば、摂関政治・院政・平氏政権・鎌倉幕府などをそれぞれ学習する際、「俺たちの土地を守ってくれ・・・という庶民の願いを誰がかなえてあげられるか」という観点を中心とした一連の流れを、その都度何度も解説していく。こ

れらを確認した後で、それぞれの詳細な分野(例えば「反平氏の動き」など)を解説していくことが有効である。

反平氏の動き … 平氏独裁「平氏でなければ人ではない」(平家物語) → 貴族・武士の不満 … 「おごる平氏は久しからず」	
庶民は自分の田んぼを守って欲しい → 貴族じゃダメだ … 貴族は税を取るだけで面倒見てくれない → 武士で天下とれそうな人はいないか … 平清盛に期待 → でも清盛って貴族のやっつることと一緒にじゃん … 平氏打倒 → 他の武士を探そ～！ → 源頼朝が守ってくれるかも～(本領安堵)	<ul style="list-style-type: none"> ・田んぼを守ってくれる人にみんなついていく ・平氏政権を応援したのも倒したのも、基本的には同じ人たち ・田んぼを守れる人へと政権は移り変わる

<図3：プリントの記載と生徒の記入例>

イ 前後の比較をしながら解説する

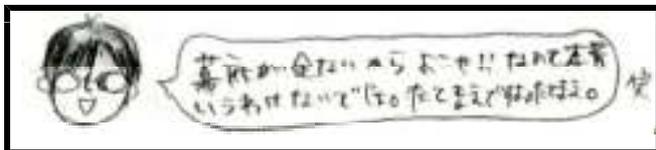
政治体制や経済体制などが変わる時は、変化前との比較について必ず解説し、プリントやノートに自分の言葉で確実に記入させる。この比較解説ということは当たり前のように行われていると思うが、これを短時間で確実にメモさせるということはとても重要なことであると同時に、実践してみると意外と難しいことである。記入の際は「比較するという内容は参考書や教科書に意外と記されていないので、授業中確実にメモしておかないと、独学では勉強しにくいぞ」ということなどを毎回くり返し指示して、確実にメモさせる。また説明の表現をかみ砕きながら(表現を変えながら)何度も同じ内容を解説する(少々くどいくらいに)、その時間を利用して生徒は自分の言葉でメモを取っていくのである。

天武天皇の政治 … 壬申の乱による有力豪族の没落 大臣を置かず、強力な天皇専制支配体制を確立
<天智天皇>…俺だってなあ、中国みたく独裁政治みたいなのをやりたかったよう…。周りはみんな昔から代々続く名門の家の豪族たち。天皇っていても豪族の中で一番の家っていうだけです。みんなベテラン豪族なので、僕が何を言ってもたてつくんだもん……。 (tw; <天武天皇>…俺は独裁政治できるんだぜ。大友皇子についたのはそれまで政府に重用されてた名門豪族だ。そいつらは負けグループだからみんな没落。代わりに俺についてきた奴らは今まで政府にほとんど重用されてないし、ほとんど政治に関して素人。だから俺が何か言ってもたてつく奴なんかいないから独裁できるんだぜ！「俺が神だ」って言っても何も言わなかったんだぞ～。 壬申の乱で今まで国を仕切ってた人たち(天智天皇万歳組)は負けちゃった。 →政治をやる人がガラッと変わった。 →だから壬申の乱は大きな変革だったのよ！！ 壬申の乱で力のある豪族は政治から離れちゃったから、周りは素人とか弱い奴ばっか。 →天武天皇が独裁出来る。(天智天皇も独裁をやりたかったのに) →強いのがいないからこんなことも言えちゃう … 天皇の神格化

<図4：プリントの記載と生徒の記入例>

ウ 「本音(政権担当者の思惑)」と「建前(政権担当者が公表した説明)」を明確に解説する

歴史は「本音」と「建前」の両面を把握できるとストーリーが繋がるようになる。つまり歴史を勉強して「つじつまが合わない」と感じたら、「建前」だけで解釈しようとしている証拠である。生徒が自分で勉強する場合は往々にして「建前」を中心に理解しようとするのが多く見られる。だからこそ授業では「本音」「建前」の両面から解説して行かなければストーリー性重視の授業とはならない。



歴史は「本音」と「建前」の両面を把握できるとストーリーが繋がるようになる。つまり歴史を勉強して「つじつまが合わない」と感じたら、「建前」だけで解釈しようとしている証拠である。生徒が自分で勉強する場合は往々にして「建前」を中心に理解しようとするのが多く見られる。だからこそ授業では「本音」「建前」の両面から解説して行かなければストーリー性重視の授業とはならない。

(4) プリント(ノート)点検

メモの取り方の上達度は生徒個々によって当然異なってくる。それを把握・指導していくため、各定期考査前にプリント(ノート等)提出を実施している。その際、次のように評価を示しながら

改善点等を指導していく。また評価は平常点として成績に加算することも年度当初から生徒に説明し、さらに提出の際には、予習復習など自分で勉強した内容も一緒に提出すれば評価に加えていくことを年度当初から何度も説明しておく。

	1 学 期	2 学 期 以 降
A	授業内容を自分なりに組み立ててまとめている	文章化等の工夫がなされている
B	授業内容がほぼ記されている	授業内容を自分なりに組み立ててまとめている
C	単語を断片的にでも書いている	授業内容がほぼ記されている
D	空欄部分に語句を入れるのみ	後で見た時に授業内容が分からない
E	未提出	未提出

<図5：評価の基準>

※「自分で勉強した内容」が評価に値する場合は1ランクアップとする

メモの取り方は慣れが重要である、そのため「授業中にメモをしっかりとる」行為自体が大切なのである。従ってたとえ生徒が、メモを取る目的や提出物を出す目的を「提出物点が欲しいから」と考えていたとしても全く問題はない。なぜなら提出するためには、必然的に授業をしっかりと聞いてメモを取り続けるという行為をし続けなければならないからである。

(5) 生徒のまとめ方

前記のとおり、生徒に授業中常にメモを取り続けさせる工夫というのは、教師の言ったことをそのままメモするのではなく、生徒自らの頭で解釈・組み立てをした内容をメモするということである。そのため当然のことながら生徒のノートを見ても、同じ内容で、同じプリントで同じ解説を聞いてまとめたはずではあるが、記載内容(まとめ方)はそれぞれ異なってくる。



←解説をそのまま、まとめている。
1学期後半に一番多いパターン。
※ 評価：B

←それぞれの内容について、文章にしてまとめようとする工夫が見られる。
※ 評価：A

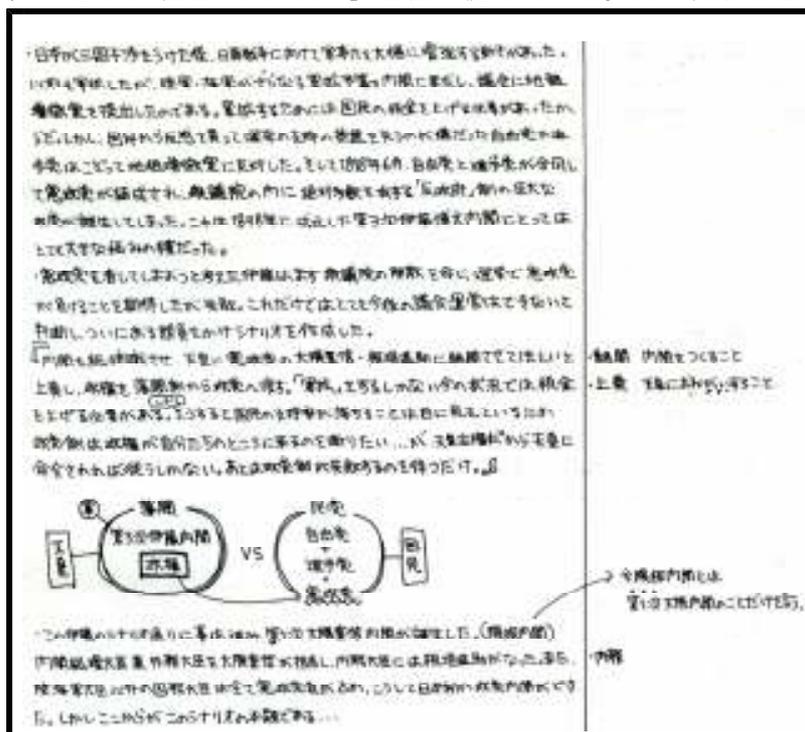
←聞き取った解説について、全体をまとめて文章化している。
※ 評価：A
<評価は図5参照
…提出は1学期>

<図6：政体書から版籍奉還・廃藩置県へのつながりについてのメモ>

(6) まず文章化

授業中メモを取る際はできる限り自分の言葉でメモする(できるだけ文章化する)よう指導しているが、このことに慣れてくると授業中だけではなく、自分で勉強する際(家庭学習等)でも文章化によりストーリー的に歴史を見ることができるようになってくる。

日本史を自ら学習する場合の具体的な勉強方法について、生徒には常々「1つのまとまり毎に文章化することから始めなさい、いきなり暗記はダメだ！」と言い続けている。文章化するという作業は前述のとおり、頭の中に入ってきた情報を組み立てるといふ、ストーリー化するための大事な作業である。だから「文章化により歴史的ストーリーの骨組みが出来上がってから、詳細について確認していく。」これが初心者向けの歴史の勉強方法である。いきなり暗記してもストーリー化できる生徒もごく稀にいるが、それは覚えた単語を頭の中で自動的に組み立てることができるという能力があるからである。



＜図7：文章化(清書の部分)された生徒のノート＞

「文章化」を利用した勉強方法として、生徒へ指示している内容を以下にまとめる。

- (ア) 1つの内容的まとまり毎に文章化すること。
- (イ) 授業の際にメモしたプリント(またはノート)を参考にして文章化すること。
- (ウ) 文章化する際の注意事項は「覚えようとしなさいこと」、文章化に集中すること。
- (エ) 最初は授業中にメモした3割程度の大まかな内容(語句)を使って、捨ててもよい程度の紙に文章化する。
- (オ) 1度文章が完成したら、何度か声に出して読んでみる。その後、その文章は捨ててしまうなど2度と見ないようにする(その文章を丸暗記しようとするのを防ぐため)。
- (カ) その後、2度目の文章化に挑戦してみる。その際は1度目の文章となるべく同じくならないように工夫して(時間的流れを逆から書いてみる、1度目に使用しなかった語句を使用してみる等)作成してみる。
- (キ) 以下(オ)～(カ)を何度か繰り返す。このことによって、絵本を読んでいた頃のように、大きな流れが自然に頭に入ってくる。(暗記するなら必ずこの後で行うこと)
- (ク) その後、ノートに文章化の仕上げ(清書)をする。… 図7参照

(7) メモの取り方の移り変わり

前記のような授業(指導)を実施した効果は、生徒のプリント(ノート)をみるとよくわかる。

ア 同じ生徒のプリントを、年度当初・1学期末頃・半年経過頃と挙げてみた

図8をみると、「メモの取り方を指導をする前(年度当初)」→「解説を聞き取って語句を書き込めるようになってきた頃(1学期末頃)」→「聞き取った解説内容を文章でまとめらるようになってきた頃(半年経過頃)」と、次第にメモの取り方が成長していることを見て取れると思う。

<図8>

Figure 8 shows a comparison of lesson materials. On the left is a printed page from a textbook titled '日本史A' (Japanese History A), specifically the section '2.3.3 開国と条約' (Opening and Treaties). It contains a list of bullet points and a small diagram. On the right is a student's handwritten notes on a similar page. The student has added a graph showing a downward trend, with labels '高' (High) and '低' (Low). The notes are dense and include various annotations, such as '①背景: 反政府の一揆・士族の反乱が頻発(1870) 藩は崩壊したが財政基盤は変わらず統制できなかった' and '②経路: 兵庫、長州、土佐の3藩から開港(政府官費負担)1万人の兵、武力を背景として開港(1853.7)'. There are also some smaller diagrams and arrows connecting different parts of the text.

左 : 年度当初
 右上 : 1 学期末頃
 右下 : 半年経過頃

イ 年度当初・年度末それぞれの時期の同一授業の比較

<図9>

Figure 9 shows a comparison of the same lesson at different times. On the left is a printed page from a textbook titled '日本史A' (Japanese History A), specifically the section '2.3.3 開国と条約' (Opening and Treaties). It contains a list of bullet points and a small diagram. On the right is a student's handwritten notes on a similar page. The notes are very dense and include many corrections and additions. There are several large arrows and circles highlighting specific parts of the text. The student has added a lot of detail, including dates and names, and has written in a more organized and detailed manner than in Figure 8. There are also some small diagrams and arrows connecting different parts of the text.

図9は左右とも同じ生徒のものである。左は年度当初(メモの取り方を指導する前)にゆっくりと進めた時のプリント(このページの実施に50分×3回)。右は年度末に、同じ分野をもう1度やったらどうなるかを試した時のプリントである(年度末の授業ペース, 40~50分でこの内容が終わる)。年度当初は口頭での解説を聞き取ってメモ

する習慣が無いため、穴埋めをする程度で終わっているのがわかる。他の生徒もほとんどと言っていいくらい同レベルである。しかし1年間の指導により、口頭で解説するだけで、しかも年度当初より明らかに短時間でプリント作成ができるようになっていたことが読み取れる。

6 生徒に自ら考える癖をつけさせる工夫

(1) 目的

歴史学にとっては「あれかな～?」「これかな～?」と考える瞬間というのは非常に重要な意味のある時間である。これをせずに暗記中心の勉強をしてもストーリー性を解釈することは難しい。この「考えること」は、語句を頭の中で組み立てる(ストーリー化する)という能力をつけることに繋がる重要な作業である。たとえ結論(発表)に結びつかなくても考えるという行為自体がとても重要な意味を持っている。自ら考え、他生徒の考えを学び、それらを文章化する事によって、歴史をストーリー化させるということが上達する。

(2) 発問

発問は授業の中で重要な役割を果たす。なぜなら生徒に考えさせる場面を作る重要な問いかけだからだ。「教師が発問して生徒がそれについて考えること」は、一見当たり前のように感じるが、教師が発問した時、それについてどの位の生徒が実際に考えているのだろうか?どんな素晴らしい発問でも、それについて生徒が考えなければ前記のような効果が期待できない。発問内容の精選は勿論大切ではあるが、大前提として、発問した時「すぐに生徒が考え始める」ことが自然に行われるような雰囲気作りをすることがとても重要となる。そのためには発問の際、以下のことをくり返し生徒に説明し浸透させ、生徒の意識を変えていくことが大切である。

- ア 日本史の授業で一番大切な(一番成長している)時間は「あれかな?」「これかな?」と考えている瞬間なんだよ。この能力が育たないと、歴史をストーリーとして捉えることが難しくなって、日本史がつまらなくなっちゃうよ。授業も楽しく受けたいでしょ。
- イ たとえ答が出なくても、考えるという行為自体が大切なんだよ。
- ウ 今やっている「発問について考え、発表する。それについて教師が解説する」という歴史を学ぶ上で一番貴重な瞬間は、独学では絶対に体験不可能なことなんだよ。
- エ 「考えること」を常にやっている人とやってない人では、約半年後には歴史を解釈する能力や点数等に大きく差が出てくるよ。
- オ 生徒が考えている最中も、次のような問いかけをしていく。
 - (ア) しっかり考えているかな?考えてないと眠くなっちゃうよ。
 - (イ) 一番成長している瞬間を無駄にしているのかな?もったいないよ。
 - (ウ) 暗記だけで点数が採れないことは実感させてあげたでしょ、思い出して。

(3) 発表

ア 目的

生徒に発表させるということは手段であって目的ではない。あくまでも、「教師が発問したときにすぐ考えるということを自然に実行できるようにする」〈上記(2)参照〉ことと「事前に調べる習慣をつける」〈後述^カ参照〉ことが目的である。そのため性格等の要因で発表できない(または発表しない)生徒を無理に発表させる必要は全くない。詳細は順次挙げるが、「発表点が欲しいから発表する」という生徒も出てくるがそれはそれでいいのである。なぜなら「事前に調べて

おく」または「発問に対してその場で考える」という行為を実行しなければ発表はできない、つまり「発表点が～」が本人の意識する発表の理由だとしても、その裏では無意識に日本史を学ぶ上で重要な作業を行っていることになるからである。

またひとりの生徒が発表しても、なるべく多くの生徒がさまざまな考え方を発表できるよう、発問を工夫し(表現を変える等)さらに同様の発問をしていく。これにより歴史学のものの見方は1つに

限定されるものは少なく、見る角度(立場)によっては多様な答がでてくるのが当然だと気付かせる側面もある。

イ 形式

授業中の発表は、生徒が挙手して教師が指名するという形式で行う。あくまでも生徒が自主的に発表するように育てていく。高校生ともなると、自ら挙手して発表する、ましてや教師に指名してもらえるような工夫(目立つ工夫)をしてまで挙手するなどという生徒はあまり多くはない(逆に、そういう生徒がいたら目立ってしまう)。しかし「分かったら挙手・発表するのが普通なんだ」という雰囲気を作れば元気に発表するようになる。

ウ 発表に対する評価

年度最初の授業で(その後も必要に応じ何回も)、発表については回数をカウントし平常点として評価に入れる。その際、発表内容が適切であっても違った内容であっても、同じ1回としてカウントするということを説明する。発表の評価は発表内容についてではなく、あくまで発表したという事実(回数)を評価していくことを何度も説明し定着化させる。このことは自由に発表する雰囲気を作るためにはとても重要なことである。なぜなら、発表の際に「○○○かな・・・でも違っていたら恥ずかしいな」などと余計なことを考えてしまったら自主的な発表など難しくなる。答が違っていてもよいことを浸透させ、少しでも思いついたらすぐ発表する雰囲気作りを行い、

	学習内容	発問項目	生徒の答え
人	・次項目「奈良時代の政治史」と同じ時代であることを確認する。 ・公地公民制、基幹収没法、租税などを復習する。 ・本時の単元なあらすじを説明 国が税収不足で財政に困っている →なんとかなければ(対策) →結果はどうなった?	①公地公民制ってどんな制度? ②国家の財を誰が握るの? ③その人を何と呼んでいた? ④割り当てられた田を何という? ⑤租税(租庸調など)の特徴は?	①土地、人民を全て国家の所有とする。 ②班田収没法で割り当てられたん。 ③班田農民 ④口分田 ⑤・男子の負担が生きていけないくらい地味に重いこと。 ・中国の制度のマネをしていること。 ⑥租 ⑦収穫の約3%だから全然軽い。
解	<原因> ・藤原政権による租税 →債権・帯になる・浮浪・逃亡 →班田農民の墾墾 →有力者の買収(租の増納・買収私墾) →国家の財源不足 <対策> ・百五町歩開墾計画(722) → 失敗 ・三世一身の法(729) → 効果なし →公地公民制を政府自ら導く政策 ・墾田永年私財法(743) → 効果なし →私有地増大の原因(初期計画の成立) →公地公民の原因を根本的に否定	①奈良時代の政府は財政面で非常に困っていた。なぜだと思う? ②債権って何でやるの? ③帯は基本的に免税。国家から大層に扱われている存在なんだよね。なぜだと思う? ④租を大事にし続けたら、奈良末期には借を返すことができなくなってた。当時の政府はそれに対してどうしたと思う? ⑤国家の財源不足の根本的な原因は何だった? ⑥長屋王政権や藤原兄政の対策は「田を増やす」だった。田を増やすとどうして財源不足がなおされるの? ⑦百五町歩開墾計画、三世一身の法、墾田永年私財法を加したら、租は出は増えた。しかし国家の財源不足は一向になおれない。何で? ⑧なぜ長屋王・藤原兄は、財政危機の原因「租負担が増えること」に対する対策を思わないの? ⑨墾田永年私財法と同じ年に出されたと言われる箇は何?	①・新しい都をつくらしていっぱいお金を使っちゃったから。 ・飢饉など災害が多かったから。 ・国民が租負担に耐えられず、税を納めなくなるから。 ②男性を女子と雇うと租負担が軽くなるから、生きるためにやった。 ③・僧は偉い人になりやすいから。 ・大仏を作ったり国が仏教を保護しているから。 ・仏様に国を守ってもらうため。 ④・逆に借を返さず、悪から逃げ出した。 ・仏教を禁止しようとした。 ・寺院の多い奈良を捨てて京都へ遷都した。 ⑤奈良が租負担に耐えられず、税を納めなくなってきたため、国家に入ってくる税収収入が少なくなったこと。 ⑥・新しい田が政府の財産となるため、政府が豊かになるから。 ・田を増やせば収穫される米も増えるため租収が増えると考えたからだと思う。 ⑦・初期荘園が増えたことによりお米が国ではなく荘園持ちの人に入るようになったから。 ・根本的な原因「租負担が重いこと」への対策にはなっていないから。 ⑧・原因を把握していなかったから。 ・偉い人は世間の生活を知らないため、庶民が税を納められなくなっている現象を知らなかったから。 ⑨大仏造立の罰
理	・国家の財政危機の原因の根本は「租負担増大」であるが、政府の対策は「田を増やす」ことである。つまり上記の対策では解決にならないことを確認。 ・藤原仲麻呂政権による租負担の軽減につながるようになる。	①「田を増やしてもダメ」それでは国家の財源不足を解消するためには何をしたらいい? ②ようやく藤原仲麻呂政権で「租負担の軽減」が実施されたが、なぜ仲麻呂は長屋王らと同じ上級貴族でありながら政府の財源を把握できたのか? ③帯は買収させた後、「この答は次項目で解説します」と説明。	①・租負担を軽くすればいい。 ・庶民が税をちゃんと納めるような制度を整えればいい。 ②・藤原仲麻呂が謀反を回って実権を握ったから。 ・原因や実態はあまり把握できなかったが、それしかもう対策がなかったから実施したら、たまたま当たった。 ・軍閥を謀反に誘って実権をさせたから。

※「生徒の答え」欄は実際の授業で出た答えをそのまま表記したため、解答として適切でないものもあるが、それについては解説の中でその趣意を説明している。

<図10：実際の発問例>

たとえ内容的に不安でも、とりあえず思いついたことや調べてきたことを発表する感覚を生徒の中に定着させることが大切だからである。

アで記した「発表できない生徒」については別の観点(提出物・授業態度等)で評価する。

エ 発表回数の推移

図11はあるクラスの1年間の発表回数をまとめたものである。

年度当初は挙手があまりなく、あったとしても毎回同じメンバー(ごく少人数)が発表している。

1学期中間考査頃から少しずつ発表人数が増え、2学期後半にはさらに増え、3学期になると今まで発表したことが1度もなかった生徒も発表し始めることが読み取れる。これは前述のような指導を繰り返してきたことにより「分か

＜図11：平成21年度 2年□組 発表回数記録用紙＞

ったら挙手・発表するのが普通」という雰囲気が次第にできてきたことを表している数字である。

オ 発問に対する生徒の答えの推移

年度当初からしばらくの間は、空欄の穴埋め(単語を答える)については挙手するが、「～はなんでそうなったと思う?」「この後どうなると思う?」のような意見等を求める発問に対する挙手はあまり見られない。たとえ発表があっても単発の知識での答え、いわゆる時代の流れに繋時がらない答えとなってしまう。以下に生徒の発言例を示す。

＜例>「日本が弱いから」<なぜ日本は不平等条約(日米和親条約など)を押しつけられるか?>
「条約が不平等のままだと困るから」<なぜ条約改正交渉が必要か?>

しかし授業中、さまざまな因果関係をストーリー重視で見ていくなかで、次第に慣れてくると「〇〇が××だから△△となった」など前後の流れを考慮した回答や、「〇〇だったり、××だったり、△△のように色々なことが考えられる」のような多面的な回答が出来るようになってくる。以下に生徒の発言例を示す。

＜例>「これまで院政が支配していた所を支配するための役所として作られた、つまり政治組織が2つになったということ」<六波羅探題って何のために作られたの?>
「日本は当時、産業革命後の国の中では一番遅れていたため、欧米列国より技術力が劣り、製品の質で勝てなかったことと、強い国から買わなければ怖いという客側の気持ちがあったと思う」
<第1次世界大戦後なぜ日本製品は売れなくなってくるのか?>

カ 予習

この自主的に発表することが定着してくると、発表の準備として予習する習慣が身に付いてくる(「7 検証」参照)。これは教師が具体的指示に与えなくても「必要だから予習する」という視点から自主的に予習するようになるため、予習の習慣化に繋がってくる。人に言われて予習するより自ら必要だと考えて予習した方が、当然のことながら長続きするものである。

(4) 表現力

発問に対しさまざまな形で考えることはとても大切な瞬間である。

この「考えたこと」を生徒どうして情報交換し、さらにそれを文章化していく。これにより歴史の見方は1つではなく見る角度(人)によって多くの側面があることが理解でき、知識として定着してくるようになる。つまり歴史の多面性を身に付けさせるという大切な作業となる。

1年間の前半の時期(おおよそ4月～10月くらい)は通常の座席配置で授業を実施。自分自身で「ストーリーを組み立てる→文章化」をすることを主な目的としている。つまり「解説を聞く→情報の活用→自分なりの言葉に組み替える→メモをとる」また「発問に対して考える→発表する」ことにより、情報を自分で活用する能力を生徒につけさせることを期待した授業展開である。

この能力がある程度身に付いてきた段階(おおよそ10月くらい)で、座席を4人程度のグループ配置として他者とともに答えを導き出す場面を設ける。これは前半期で培ってきた能力を生かし「表現する」ことを主題とした授業展開である。(他の側面として、お互いのメモの取り方を見せ合うことができるというメリットもある)。

この一連の流れは、全ての場面において「考える」ことが必要となる。つまり教師が「考えなさい」と直接的に指示する場面以外でも必然的に「考える」という癖を付けさせるために有効な手段である。実施の際には以下のことを年度当初よりその都度生徒に説明し、意義を理解させた上で授業に参加させることが必要である。

日本史を学ぶ上で大切な能力とは「情報収集→史料の活用→ストーリーの組み立て→文章化(出来るだけ簡単な表現が望ましい)→表現(他者に説明する等)」することである、「暗記」が最重要なのではない。いくら暗記してもこの能力がないと歴史のストーリー化には繋がらない。この日本史の授業では1年間通して、歴史的な語句だけではなくこれらの能力をしっかりと身につけて欲しい。

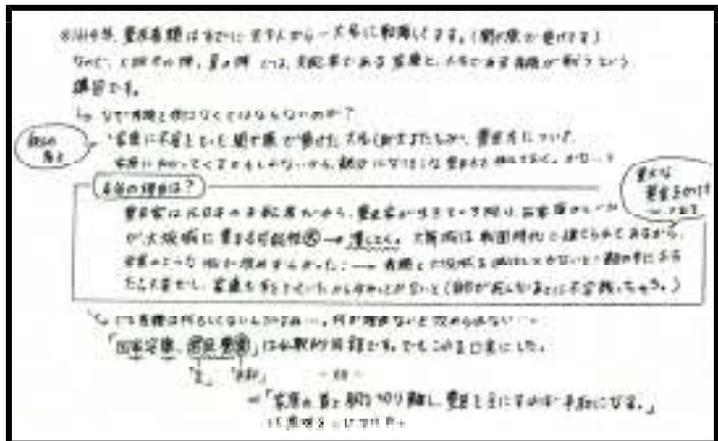
これらのことを実施した際の生徒のメモを次に挙げてみる。

ア 自分で考える

〈発問〉大坂の陣について。なぜ家康はこのタイミングで豊臣家滅亡を実施しなければいけないか？

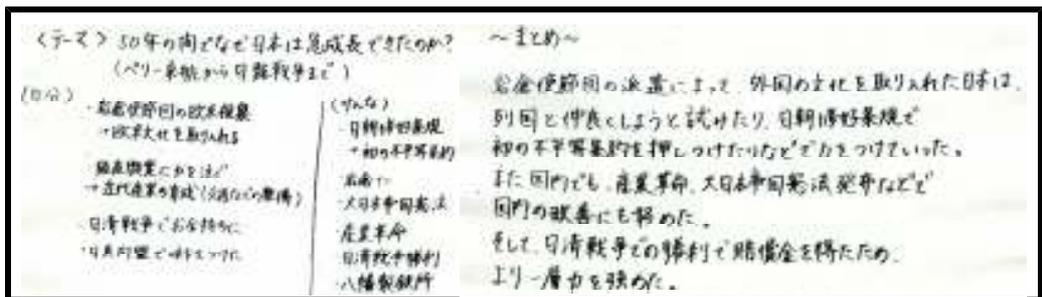
イ 情報交換を取り入れる

〈発問〉ペリー来航の時にはなすすべの無かった日本が、日露戦争の頃には列国の仲間入りを果たす程成長した。この約50年間で何があったのか？



〈図12：自分で考える頃の生徒のメモ〉

図12は通常の座席配置で実施した頃のもので、図13は座席をグループ配置とした頃のものである。



〈図13：情報交換を取り入れた頃の生徒のメモ〉

当初は、自分の考えを1つ書いて後は授業中の解説をまとめているのに対し、自分の意見と他者の意見を

合わせて自分の言葉でまとめることができ、さらに自分の考えも複数の視点から書いてきていることが読み取れる。なお、発問内容に応じて多少時間が異なるが、時間はそれぞれ3～5分程度である。

7 検証

年度末の生徒によるアンケートから生徒の変化を読み取ってみる。「日本史が好き」な生徒の割合は85.7%(年度当初は59.8%)となった。「日本史が得意」という生徒は50.0%(年度当初は29.6%)であった、これは「授業を通して点数がとれるようになってきたと感じている」生徒が76.9%いることから伺える。これらは「日本史＝暗記物」と考えている生徒が15.4%(年度当初は70.6%)に減少し、日本史に対する意識改善が達成できたことを物語っている。一方で「他の授業でもメモをしっかり取るようになった」生徒が75.4%にのぼることは波及効果といえる。また授業以外の学習面については、「日本史について自ら調べる」生徒が76.1%(年度当初は19.8%)、「日本史について図書館を利用するようになった」生徒は57.7%(年度当初は2.7%)。この数字から授業以外での学習習慣が以前よりついてきたという側面も伺える。日本史に対する興味関心や必要性という認識の高まりが、自ら調べるということに結びついた。自由記述欄に多数記された生徒の意見を以下に示す。

▲先生の言ったことを自分でまとめていくと知らず知らずに自分の中で整理しながら覚えられるので良かった▲欠席とかで授業を聞いてないと、後で友達のノートを写してもよく分からない、授業中に解説を聞き自分でまとめる大切さを感じた▲いちいち黒板に書かないので1時間かなり集中できます、聞き取る力(?)の訓練も一緒にしているような気がします▲しっかりと流れを教えてください、また分かり易い言葉に改めて話してくれるのですごく分かりやすかった、何しろ一番驚いたのは何日・何ヶ月経っても少し振り返ると授業内容を思い出せるのです▲授業の中で質問を投げかけ考えさせることが多かったので納得しながら勉強することができた▲生徒の活躍の場もあって、それをうながしてくれるので発表しやすいし、授業が身につけている気がします▲グループになって授業をうけることで発表しやすくなった▲発表が自主制なので予習を欠かさずする習慣ができました▲本音がわかるとこれほど歴史の流れがつながるのかと驚いた▲自分でノートをストーリーに変えてみたら、すぐに頭に入って驚きました。自分で図を使って考えたりするのが最近は楽しくなって、歴史が好きになりました▲「歴史の流れをつかめばいいんだ」と知ってとても歴史が楽しくなって親ともよく歴史の話をするようになった▲ただの暗記科目が小説や映画を見ているような楽しい科目になった▲最近、本当に日本史の授業が楽しくて、今まで嫌いなところもあったことがウソみたいですよ!!それもきっと日本史を暗記ではなく物語と考えるようになったからだと思います▲時代背景をすごく分かりやすく教えてくれるので暗記が苦手な私も物語を覚えているような感じでとても覚えやすいです▲日本史は暗記じゃ太刀打ちできないことを思い知った 【表現は原文のまま】

授業に対する生徒の印象は、年度当初は「眠い」「先生がよくしゃべる」「板書形式の方が何を書いていいかわかっていい」などマイナス面の評価が多い。しかしこの研究で示した内容は、「実行し続ける＝慣れる」ことが重要であるため、時間の経過とともに授業に対する満足度も次第にアップしてくる。日本史が楽しみな科目になることが、歴史的な思考力・判断力・表現力などさまざまな能力をつけていく近道になる。

8 おわりに ～課題と展望～

- (1) このような試みがそもそも「日本史が好き」と答えた生徒群と「日本史が嫌い」と答えた生徒群にそれぞれどのような影響をより多く与えたのか。
- (2) 同様に、「得意」と答えた生徒群、「苦手」と答えた生徒群、それぞれへの影響は同じだったのか、各生徒群ごとの分析。
- (3) メモの取り方の進歩と、思考力・表現力向上の因果関係。
- (4) 発表の評価と、思考力・表現力向上の因果関係。

以上のことなどについてさらに突っ込んだ分析をし、そこに新たな課題を見出す努力を続けていきたいと思う。